

アリス・ウォーカーの『メリディアン』について

石川 和代

On Alice Walker's *Meridian*

Kazuyo ISHIKAWA

I

Meridian (1976) は、アメリカの黒人女性作家Alice Walkerの第2作目の長編小説であり、主人公は黒人女性のMeridianである。この作品について、Ashis Senguptaは、“*Meridian* is a maturation novel which celebrates the protagonist's triumphant emergence as a strong and wise black woman.”¹と述べ、Deborah E. McDowellは、次のように述べている。

But in *Meridian* (1976), Walker's latest and probably most artistically mature work, she transcends the boundaries of the female gender to embrace more universal concerns about individual autonomy, self-reliance, and self-realization. In the tradition of the *Bildungsroman*, or apprenticeship novel, the book chronicles the series of initiatory experiences which Meridian, the title character, undergoes in an effort to find her identity, or her own moral center, and develop a completeness of being.²

二人の批評家の意見からもわかるように、作品は主人公Meridianが様々な経験を通して、自己探求して、自己発見し、自己実現に至る過程を描いた作品である。

作品は、Meridian、Truman Held、Endingの3つの部分から成り、Meridianの中に15章、Truman Heldの中に10章、Endingの中に9章という構成である。作品の第1章“The Last Return”の冒頭は小説の現在であり、体調のよくないMeridianが描かれ、第1章の途中から回想として過去に主人公が経験した様々なできごと、主人公の成長過程が描かれ、Endingに含まれる9章は、主に小説の現在について描かれている。Endingの最後にあたる最終章“Release”では、体調が回復し、新しい出発をする主人公が描かれる。第1章と最終章の間で描かれるMeridianの人生を簡単に述べておきたい。Meridianは高校生の時に妊娠したために退学し、Eddieと結婚して二人で簡素な暮らしを始めるが、彼女は自分が赤ん坊を欲しがっていないことを知っている。赤ん坊が生まれてからは、その世話に疲れて、ときどき子供を殺そうと夢見る。MeridianはEddieを愛することができず、彼は家を出てしまう。彼女はテレビを見ていて、近所の家で黒人の投票権登録運動が始まり、運動員として働く地域の黒人が求められていることを知り、広い世界の過去と現在を意識し始めるが、この時彼女はまだ17歳である。翌日のテレビで、運動の始まった家に爆弾が投げ込まれて、その家は跡形もなくなり、死者や負傷者が出たことを知ってから、Meridianは毎朝、子どもを義理の母に預け、夕方近くに子供をひきとる生活を始め、投票権登録運動に参加するようになる。その後、彼女はAtlantaのSaxon Collegeに入

学する機会を与えられたため、子育てよりもCollegeでの生活を優先して、子供を欲しがっている夫婦に、わが子をやってしまう。Collegeで学業に励むかたわら、運動にも参加するうちに、運動の中心者であるTrumanに恋して、妊娠する。Meridianは妊娠中絶し、さらには、不妊手術を受け、母親であることを完全に捨てる。College卒業後、Meridianは学生時代の仲間Anne-Marionと一緒に、しばらくNew Yorkで暮らす。彼女は、「革命のためにすすんで死ぬ」と宣言することはできても、どうしても「革命のために殺す」と答えることはできず、それは自分が過去の何かからしっかりとつかまえているからだと感じる。そして、Meridianは北部を去って、南部へ戻ることになる。彼女は、自分は革命家として失格者であると考えているが、最後には自分なりの道を発見して歩み出す。この小論では、主に、主人公Meridianが自己探究して、自己発見し、自己実現に至る過程について考えてみたいと思う。

II

作品の第1章の冒頭では、Meridianのかつての恋人Trumanが、New Yorkから南部のChicokemaへ彼女を訪ねて来た時のことが描かれるが、この時の彼女は、活動しながらも、体調は悪く気絶の発作に苦しんでいる。活動の後で気絶の発作を起こして、家にかつぎこまれたMeridianを見て、Trumanは非常に驚く。

“What are you continuing to do to yourself?” he asked, holding her bony, ice-cold hand in his. Her face alarmed him. It was wasted and rough, the skin a sallow, unhealthy brown, with pimples across her forehead and on her chin. Her eyes were glassy and yellow and did not seem to focus at once. Her breath, like her clothes, was sour.³

ここでのMeridianは、血色も悪く吹き出物ができており、目は黄色っぽく焦点が合わず、息はすえた臭いで、不健康な状態であることを示している。Trumanは、意識がない彼女から帽子をとり、自分のハンカチをぬらして顔を拭いてやるが、彼は、Meridianには全く頭髪がなくなっていることを発見する。彼女のこの状態は、最終章で新しい出発をするMeridianの姿とは対照的であるが、最終章については、最後に述べることにする。

第1章の途中で、最初に回想として語られる箇所は、10年前の夏、彼女が学生時代の仲間Anne-Marionと一緒に、しばらくNew Yorkで暮らしていた時のできごとである。

To join this group she must make a declaration of her willingness to die for the Revolution, which she had done. She must also answer the question “Will you kill for the Revolution?” with a positive Yes. This, however, her tongue could not manage. Through her mind was running a small voice that screamed: “Something’s missing in me. Something’s *missing*!” And the voice made her heart pound and her ears roar. “Something the old folks with their hymns and proverbs forgot to pit in! What is it? What? *What?*” (14)

グループに入るために、Meridianは、革命のためにすすんで死ぬと宣言することはできるが、「革命のために殺すか」という質問に対して、仲間のAnne-Marionのように、積極的に「イエス」と答えることはできない。Meridianはどうしても「革命のために殺す」と言えないのであるが、彼女の心の中にあるこだわりについて、次のように描かれている。

But what none of them seemed to understand was that she felt herself to be, not

holding on to something from the past, but *held* by something in the past: by the memory of old black men in the South who, caught by surprise in the eye of a camera, never shifted their position but looked directly back; by the sight of young girls singing in a country choir, their hair shining with brushings and grease, their voices the voices of angels. When she was transformed in church it was always by the purity of the singers' souls, which she could actually *hear*, the purity that lifted their songs like a flight of doves above her music-drunken head. If they committed murder—and to her even revolutionary murder was murder—*what would the music be like?* (14)

Meridianは、自分が過去の何かにこだわっているのではなく、過去の何かからしっかりつかまえられているのだと感じていたのである。そして、彼女を捕えていたのは南部の年とった黒人たちの記憶であり、故郷の合唱隊で歌っていた若い娘たちの姿である。Meridianにとっては、革命のための殺人であっても、殺人は殺人であり、彼女は、もしその娘たちが殺人を犯したら、音楽は一体どうなってしまうだろうと思うのである。Meridianの心は、南部と黒人の音楽に捕えられていると言えるかもしれない。

Meridianが答えるのを皆が待っている時、彼女は何も言えないまま、母のこと、母を失った日のことを思い出す。Meridianが13歳で、教会で母の隣に坐り、すばらしい音楽に酔っていた時、「神を信じると言いなさい」と母が言い、娘の涙を見て、「自分の心を偽らないようにね」と言う。その時、Meridianは、押し黙ったまま坐っているだけである。彼女は母の手を自分の手で包み、それをじっと握って、それを唇にあてようとするが、母は、嘆きと涙の中で顔中をぬらしながら立ち去ってしまい、“Her mother's love was gone, withdrawn, and there were conditions to be met before it would be returned. Conditions Meridian was never able to meet.” (17-18) とあるように、Meridianは、「母の愛は消えてしまった、ひっこめられてしまった」と感じ、「それを取り戻すにはいくつかの条件があって、そのどれも自分が決して満たすことができないもの」だと考えるのである。グループの1員の「眠っているの？」と言う声で、Meridianは過去から現在に呼び戻されるが、殺すと言いきることはできない。Anne-Marionから、“What will you do? Where will you go?” (19) と聞かれると、Meridianは、“I'll go back to the people, live among them, like Civil Rights workers used to do.” (19) と答え、彼女は北部を去り、南部に戻るのである。

ここで過去にさかのぼり、高校生の時に妊娠し、Eddieと結婚したMeridianの生活について、まず考えていくことにしたい。子供が生まれた後、MeridianはEddieを愛することができず、彼は家を出てしまう。その後、Meridianは、テレビを見ていて、黒人の投票権登録運動のことを知る。

Now she sat listlessly, staring at the TV. The house she has passed was on. There was to be a voter registration drive (she wondered what that was) that would begin in the city, at that house, and work its way out to the people in the country. Local blacks, volunteers, were needed. . . . But this concerned her, gathered her attention, only superficially, for all its surprise. It kept her mind somewhere else while she made her hands play with the baby, whom, even then, she had urges to kill. (69)

テレビのニュースは、表面的とはいえ、Meridianの注意をとらえ、彼女は赤ん坊をあやしなながらも、心は別のところにひき寄せられ、赤ん坊を殺したいという衝動にかられる。彼女は、翌日のテレビのニュースを見て、投票権登録運動が始まったその家に火焰爆弾が投げ込まれ

て、家が跡形もなくなり、死者や負傷者が出たことを知る。この後に、“And so it was that one day in the middle of April in 1960 Meridian Hill became aware of the past and present of the larger world.” (70) という箇所があり、この事件を知ったことが、Meridianが広い世界を意識し始めるきっかけとなることが分る。この爆弾事件以後、毎朝、Meridianは子供を義理の母親に預け、夕方ひとりに行くようになる。子供を預けて一人で自宅に戻ると、寝室の窓の縁に両脚をあげてもたせかけ、最初は自分がしていることを意識しないまま、自分の現在の状態についてよく考えてみようとするのだが、その時、彼女は次のように感じる。

At first it was like falling back into a time that never was, a time of complete rest, like a faint. Her senses were stopped, while her body rested; only in her head did she feel something, and it was a sensation of lightness—a lightness like the inside of a drum. The air inside her head was pure of thought, at first. (71)

ここでMeridianが感じているのは、軽さの知覚である。世話をしなくてはならない子供を預けて、身軽になったために感じる軽さと言えるかもしれない。そしてMeridianは、この1ヶ月後に、投票権登録運動に参加し始める。Meridianが運動に参加していることを自分の母に告げるまでには時間がかかり、話した時にはすでに知っており、母の反応は次のようなものである。

“As far as I’m concerned,” said Mrs. Hill, “you’ve wasted a year of your life, fooling around with those people. The papers say they’re crazy. God separated the sheeps from the goats and the black folks from the white. And me from anybody that acts as foolish as they do. It never bothered *me* to sit in the back of the bus, you get just as good a view and you don’t have all those nasty white asses passing you.” (83)

Meridianの母は、黒人が白人より劣るべく差別されていることに全く疑問を感じていない。Meridianは無視しようとするが、母は断固として、“If somebody thinks he’ll have to pee when he gets to town, let him use his own toilet before he leaves home! That’s what we did when I was coming up!” (83) と言うのである。運動の意義を理解できない母であるから、MeridianがSaxon Collegeに入学する機会を与えられたので、Collegeに行きたいという意志を伝えた時、自分で子育てをすることの方が重要であるとMeridianに言う。だが、Meridian自身は、子供を欲しがっている夫婦に、わが子をやり、Saxon Collegeでの生活を優先することになる。

Meridianが子供を殺したいという衝動にかられ、義理の母に子供を預けた後で軽さの知覚を感じ、他人に自分の子供をやってしまい、Collegeでの生活を優先するのは、彼女が知っている母の歴史が影響を与えていると思われる。Ashis Senguptaは、“Tradition imposes motherhood on a woman and encourages her self-sacrifice for the sake of her family and society. But Meridian finds this condition of womanhood simply suffocating.”⁴と述べているが、これまでの母親たちのように、子供のために自分を犠牲にすることは、Meridianには息苦しいことであると思われる。

Meridianの知っている母の歴史に目を向けてみたい。Meridianの母の曾祖母の母親は奴隷で、子供を二人ともよちよち歩きの時に取りあげられたが、二人を買い取った男から盗み、また取りあげられ、また盗むことをくり返し、3度目に鞭打たれた末にやっと二人を手元に置くことを許された。ただし、自分でまかなうほかには一切食べ物を与えてもらえないという条件であった。そのため、夏は苺や山ごぼうを取り、秋には木の実を食べ、川でつかまえた魚を燻して食べたり、罫をしかけて捕えた野生の動物を食べたりして、子供たちが10代になるまでは

親子三人が生き延びたが、母親は何年にも渡って積み重ねられた慢性の飢えのために死に、子供たちは売り払われた。Meridianの母親は、学校の教師になる決意を貫いたが、彼女が教育のために払った努力の物語は哀しいものである。

First, she had come up against her father, who said she did not need to go to school because if she only learned to cook collard greens, shortbread and fried okra, some poor soul of a man might have her, and second, she had to decide to accept the self-sacrifice of her mother, whom she had worshiped. Her mother, by that time, was pregnant with her twelfth child, and her hair had already turned white. But it was her mother who made the bargain with her father that allowed her to go to school. The agreement was wretched: School would cost twelve dollars a year, and her mother would have to earn every cent of it. (129)

Meridianの母の父親は、女は料理ができれば誰かが嫁にもらってくれるだろうから、学校に行く必要はないと反対し、彼女は母親の自己犠牲を受ける決心をする。12番目の子供を身ごもっていて、既に髪も白くなっている母親は、自分の娘が学校に行けるようにするために取り引きをし、学校にかかる費用を全て自分で稼ぐという取り決めを受け入れるのである。そして、母親は、お金を稼ぐために、自分の家の洗濯と畑仕事を終えた後、不満も言わずによその家の洗濯をしに出かける大変な生活をする。Meridianの母が学校の教師になってからまもなく、その母親は亡くなる。Meridianの母の曾祖母の母親、Meridianの母の母親は、いずれもわが子のために、自分を犠牲にしていることがよく分かる。Donna Haisty Winchellが、“Her family history is one of mothers who sacrificed even life itself for their children.”⁵と指摘する通りである。

このようにして、Meridianの母は学校教師になるのであるが、同じ学校の教師と結婚して、子供が生まれると、子育てのために仕事をやめ、子供たちが大きくなって、それほど手がかからなくなった時に、もう一度教壇に立ちたいと思うが、新しい試験に受かるはずもなく、再び教壇に立つことはない。Meridianの母も、子供のために、自分を犠牲にしているのである。“Meridian was conscious always of a feeling of guilt, even as a child. Yet she did not know of what she might be guilty.” (40) とあり、Meridianは子供のときから一種の罪の意識をもっている。その意識については、“It was for stealing her mother’s serenity, for shattering her mother’s emerging self, that Meridian felt guilty from the very first, though she was unable to understand how this could possibly be her fault.” (43) という箇所があり、Meridianが罪の意識をもったのは、母の平安を破ったためであり、母の湧きあがってこようとする自我を打ち砕いたためであった。また、Meridianは、すでに大きすぎる重荷を背負っている母のところに、自分など生まれてこなければよかったと、心から思う。そして、母にはたちうちできないと考える。

It seemed to Meridian that her legacy from her mother’s endurance, her unerring knowledge of rightness and her pursuit of it through all distractions, was one she would never be able to match. It never occurred to her that her mother’s and her grandmother’s extreme purity of life was compelled by necessity. They had not lived in an age of choice. (130)

母の辛抱強さ、決して間違ふことのない正義の識別、あくまで正義を追求する心は、たとえ自分がそれらを受け継いでいるにしても、母にはたちうちできないと、Meridianには思えるの

である。

先に述べたように、MeridianはSaxon Collegeでの生活を優先するために、子供を欲しがっている夫婦に自分の子供をやってしまうが、彼女は、自分は過去の母たちの歴史に連なることのないただ一人であると思う。

Meridian knew that enslaved women had been made miserable by the sale of their children, that they had laid down their lives gladly, for their children, that the daughters of these enslaved women had thought their greatest blessing from “Freedom” was that it meant they could keep their own children. And what had Meridian Hill done with *her* precious child? She had given him away. She thought of her mother as being worthy of this maternal history, and of herself as belonging to an unworthy minority, for which there was no precedent and of which she was, as far as she knew, the only member. (90)

このように思うMeridianには、Collegeの構内を歩いている時に、一つの声が聴こえ始めるが、それは次のようなものである。

A voice that cursed her existence—an existence that could not live up to the standard of motherhood that had gone before. It said, over and over, until she would literally reel in the streets, her head between her hands: Why don't you die? Why not kill yourself? Jump into the traffic! Lie down under the wheels of that big truck! Jump off the roof, as long as you're up there! Always, the voice. Mocking, making fun. It frightened her because the voice urging her on—the voice that said terrible things about her lack of value—was her own voice. It was talking to her, and it was full of hate. (90-91)

彼女に聴こえる声は、ごくあたりまえの母性すらそなえられないまま、それを失ってしまった彼女の存在をのしる声であり、自分の人間としての価値の欠如についてひどいことを言う自分自身の声であり、その声は憎しみに満ちている。Meridianは、Saxon Collegeで授業に没頭し、たくさんの本を読み、失われた時を償おうとする。熱心に勉強し、よい成績をおさめ、2年目に入ってからアトランタ運動に加わる。殴られたり、留置場に入れられたりする人がいるのに、自分だけ勉強しているわけにはいかないと思ったからである。Anne-Marionと友だちになってからは、二人でデモに行き、留置場に入る経験もする。Meridianは、運動に心を奪われていない時はきまって母のことを考えているのに気づく。

Meridian found, when she was not preoccupied with the Movement, that her thoughts turned with regularity and intensity to her mother, on whose account she endured wave after wave of an primeval guilt. She imagined her mother in church, in which she had invested all that was still energetic in her life, praying for her daughter's soul, and yet, having no concern, no understanding of her daughter's *life* whatsoever; but Meridian did not condemn her for this. Away from her mother, Meridian thought of her as Black Motherhood personified, and of that great institution she was in terrible awe, comprehending as she did the horror, the narrowing of perspective, for mother and for child, it had invariably meant. (96)

波のように次々と押し寄せてくるほとんど原罪ともいえる意識を、Meridianは母のために耐え、Meridianは、母を人格化された黒人の母性そのものと思い、黒人の母性という概念を畏

敬の念をもってとらえるのである。この状況から考えると、Donna Haisty Winchellの、“The move to Atlanta thrusts Meridian into the heart of the civil rights movement, but it does not provide a means of escape from the guilt that she feels for having failed as a daughter and as a mother.”⁶という指摘は、納得できるものであると言える。

Meridianの身体は、日々のストレスで日ごとに弱まるが、彼女は自分の身体が“stood in the way of a reconciliation between her mother and that part of her own soul her mother could, perhaps, love.” (96-97) であると思い、肉体を軽視して注意を怠るようになる。彼女は、警官に棍棒で殴られて意識を失った時も、身体の傷は気にならない。

Only once was she beaten into unconsciousness, and it was not the damage done to her body that she remembered when she woke up, but her feeling of yearning, of heartsick longing for forgiveness, as she saw the bright lights explode behind the red blood that curtained her face, and her feeling of hope as the harsh light of consciousness began to fade. (97)

意識が戻った時に最初に心に浮かぶのは、これで許されるのではないかという悲痛な願望である。肉体を軽視するMeridianは髪の毛が薄くなり、視力がぼやけても気にしない。

MeridianはTrumanに恋して妊娠し、その妊娠を中絶し、不妊手術を受けるが、その後のできごととして、つぎのような場面がある。

She returned to the apartment sicker than when she left. Happily, two days later, neither the fainting nor the blue-black spells had returned. Then she found—on trying to get out of bed—that her legs no longer worked. Since she had experienced paralysis before, this worried her less than the losing of her eye sight. As the days passed—and she attempted to nibble at the dishes Anne-Marion brought—she discovered herself becoming more and more full, with no appetite whatsoever. And, to her complete surprise and astonished joy, she began to experience ecstasy. (123-124)

食欲がないのに、どんどん満腹になり、そして恍惚状態を経験し始めるのである。そして恍惚状態は次のように描かれる。

Sometimes, lying on her bed, not hungry, not cold, not worried (because she realized the worry part of her brain had been the landslide behind her brows and that it had slid down and therefore no longer functioned), she felt as if a warm, strong light bore her up and that she was a beloved part of the universe; that she was innocent even as the rocks are innocent, and unpolluted as the first waters. And when Anne-Marion sat beside the bed and scolded her for not eating, she was amazed that Anne-Marion could not see how happy and content she was. (124)

Meridianは、空腹も感じることなく、心配事もなく、自分が宇宙の祝福された一点となって、無垢で汚れがないと感ずるのである。食欲を感じない状態でベッドで寝ている生活が1ヶ月近くになった頃、Meridianと同郷で、Meridianの家族とは知り合いで、Saxon Collegeの卒業生であるMiss Winterが、Anne-Marionから状況を聞き、見舞いに来てくれる。その時のMiss Winterの一言によって、Meridianは、少し元気を取り戻すことになる。その場面は、次のようなものである。

When she slept she dreamed she was on a ship with her mother, and her mother was holding her over the railing about to drop her into the sea. Danger was all around and

her mother refused to let her go.

“Mama, I love you. Let me go,” she whispered, licking the salt from her mother’s black arms.

Instinctively, as if Meridian were her own child, Miss Winter answered, close to her ear on the pillow, “I forgive you.” (130-131)

母から許してもらいたいという悲痛な願望を抱いていたMeridianにとって、「許してあげるわ」の一言は、たとえそれが母からの言葉ではなく、Miss Winterからの言葉であっても、大きな意味がある。母と一緒にいる夢をみていたMeridianには、おそらくそれは、母が「許してあげるわ」と言ったように聞こえたかもしれない。“The next morning Meridian ate all her breakfast, though it would not all stay down. For the first time she asked for a mirror and tried to sit up in bed.” (131) とあるように、許しの言葉を聞いた翌朝から、Meridianは、徐々にではあるが、元気になり始めるのである。ここでやっと、Meridianは、子供のころから母に対して感じていた罪の意識から解放されると言えるであろう。

先に述べたように、Meridianは、Saxon College卒業後にAnne-Marionと一緒にしばらくNew Yorkで暮らした後、南部へ戻って、いくつかの町で生活する。Meridianがかって恋したTrumanは、ユダヤ系の白人の女性Lynneと結婚する。Lynneは妊娠すると一人でNew Yorkへ出て、娘のCamaraを出産し、TrumanがMeridianのもとへ戻ることを認める。TrumanはMeridianの所へ行ったり、別の白人の娘と暮らしたりという生活を続けることになる。Meridianの所には、TrumanだけでなくLynneがやって来ることもあり、親しい付き合いをするようになる。TrumanとLynneの娘のCamaraが死んだ時に、Trumanが真っ先に助けを求めるのは、Meridianである。Meridianは、Trumanを助けると同時に、Lynneも助けようと努力し、1ヶ月の間、芸術家であるTrumanのスタジオとLynneのアパートの間を往復して、献身的に二人を助けることになるが、Martha J. McGowanは、“Meridian’s continued extension of sympathy represents—more than her “performances” do—a deeply human achievement.”⁷ と述べている。Meridianが、自分がかって恋した男性の妻をも助ける努力をする点を考えると、この指摘は的を得ていると言わざるを得ない。

「革命のために殺す」と言うことができないMeridianが自分なりの道を見出すのは、南部においてである。1968年の春以降、Meridianは、時々不規則にはあるが、教会に行き始める。教会は、彼女の子供の頃の教会のようではなく、堂々とした構えで、どっしりとしている。彼女は数週間、日曜毎に、いろいろな教会を選び、最後に自分でも理由が分からないまま、大きな白いバプテスト教会の中に入る。そこでは祈りも歌も説教の内容も、彼女の子供の頃の教会とは全く異なっている。牧師は、Martin Luther Kingそっくりの声音で話し、若い女性たちには、夫探しはやめて、何か有益なことを頭に入れるように語りかける。そして、参照として使う時だけしか、神に触れることはない。「アーメン」の声の響きは、「もううんざりだ」という調子を帯びている。ステンドグラスの図柄もキリストではなく、若いアーティストが作った黒人が描かれている。説教の後で、公民権運動で息子を殺された赤い目の男が、説教壇を背にして立って話す。この日は彼の息子の死の記念日であり、教会には、息子の写真と花が飾られている。赤い目の男は、息子の死の記念日だけ出席することを望まれ、教会にやって来て、人々の前に立ち、人々は彼がどんな様子でそこにしようと、そのままの彼を受け入れるのである。Meridianは、教会を出てから、写真の青年の顔を思い返しながらかえるうちに、教会で目撃した儀式には一つの道理があり、それが何かはっと思い当たり、人々は赤い目の男に次のよう

なことを語りかけていたのだと感じる。

“Look,” they were saying, “we are slow to awaken to the notion that we are only as other women and men, and even slower to move in anger, but we are gathering ourselves to fight for and protect what your son fought for on behalf of us. If you will let us weave your story and your son’s life and death into what we already know—into the songs, the sermons, the ‘brother and sister’—we will soon be so angry we cannot help but move. Understand this,” they were saying, “the church” (and Meridian knew they did not mean simply “church,” as in Baptist, Methodist or whatnot, but rather communal spirit, togetherness, righteous convergence), “the music, the form of worship that has always sustained us, the kind of ritual you share with us, these are the ways to transformation that we know. We want to take this with us as far as we can.” (219)

Meridianがこのように理解した時、彼女の胸の中で何かが破られたかのように、彼女の生命は彼女自身を越えて周囲の人々のものでもあるとさとする。

For she understood, finally, that the respect she owed her life was to continue, against whatever obstacles, to live it, and not to give up any particle of it without a fight to the death, preferably *not* her own. And that this existence extended beyond herself to those around her because, in fact, the years in America had created them One Life. (219-220)

このように考えながら、教会から帰っていく車でいっぱいになった道の脇にある大きな木の下で、Meridianは、目の赤い男への誓いを自分自身にたてる。それは「いいわ、私も必ず殺す、誰かにあなたの息子を再び殺させる前に」という誓いである。Meridianが自分にたてた誓いを守る気持ちはいつも不動というわけではなく、時には全くその気持ちがなくなることもさえある。そういう時は、彼女は“I am not yet at the point of being able to kill anyone myself, nor—except for the false urgings that come to me in periods of grief and rage—will I ever be. I am a failure then, as the kind of revolutionary Anne-Marion and her acquaintances were.” (220-221) と考える。そして、Meridianは次のように思うのである。

But then, she thought, perhaps it will be my part to walk behind the real revolutionaries—those who know they must spill blood in order to help the poor and the black and therefore go right ahead—and when they stop to wash off the blood and find their throats too choked with the smell of murdered flesh to sing, I will come forward and sing from memory songs they will need once more to hear. For it is the song of the people, transformed by the experiences of each generation, that holds them together, and if any part of it is lost the people suffer and are without soul. If I can only do that, my role will not have been a useless one after all. (221)

Meridianは、自分のことを革命家としては失格者であると考えた後で、自分の役目は本当の革命家たちの後を歩いていくことなのかもしれない、革命家たちが歌うことができない時に、自分が前に出て、彼らがもう一度聴きたいと願っている懐かしい歌を歌おう、それができれば、自分の役目は結局は無駄はなかったことになるだろうという考えにたどりつく。自己探究を続けて来たMeridianが、自己発見を成し遂げるのが、この時であると言える。

自分のすすむべき道を見出したMeridianは、南部で自分なりの活動をしながら生きていくわけであるが、始めに述べたように、最終章“Release”では、体調が回復し、新しい出発を

する主人公が描かれる。最終章におけるMeridianについては、Trumanが感じた内容が、次のように述べられている。

She was strong enough to go and owned nothing to pack. She had discarded her cap, and the soft wool of her newly grown hair framed her thin, resolute face. His first thought was of Lazarus, but then he tried to recall someone less passive, who had raised himself without help. Meridian would return to the world cleansed of sickness. That was what he knew. (241)

Meridianには新しい土地へ出発するだけの力があり、第1章の冒頭でかぶっていた帽子も捨て、新しく生えてきた柔らかい髪の毛が彼女のほっそりとして、決然とした顔を縁どっているのが、極めて印象的であり、Meridianが新たな出発をする場面にふさわしい描写であると感じられる。Meridianは、Chicokemaの自分の家にTrumanを一人残して、自分の活動をするために、新しい土地へと旅立っていくのである。Geri Batesが、“Walker’s character Meridian attaches herself permanently to the South and southern African Americans because of the affinity she develops for its people.”⁸と述べているように、Meridianは、南部の人々の中で、活動を続けていく。

このように作品を見てみると、Meridianは子供の頃から、母親に対して罪の意識を感じていたが、その背景には、常に子供のために自分を犠牲にしてきた南部の黒人の母親の歴史があったことが分かる。Meridianは広い世界の過去と原罪を意識し始め、子供のために自分を犠牲にすることを息苦しく感じて、母親であることをやめ、Collegeでの生活を優先し、活動に取り組む人生を選ぶが、本当の革命家のように、「革命のために殺す」と言うことはできない。彼女には心のこだわりがあり、先に述べたように、それは、彼女が過去の何かからしっかりつかまえられているのだと感じていたことであり、彼女を捕えていたのは南部の年とった黒人たちの記憶であり、故郷の合唱隊で歌っていた若い娘たちの姿である。Meridianの人生は、どこまでも、故郷である南部と切り離すことはできない。Meridianは、自己探究の過程では一時的に北部のNew Yorkで暮らすものの、自己を発見するのは南部に戻ってから行き始めた教会においてである。そして、彼女は、自己実現を成し遂げるために、南部のChicokemaの家にTrumanを一人残して、南部の別の土地に向かって、出発するのである。

注

- ¹ Ashis Sengupta, “Search for Black Womanhood in Alice Walker’s *Meridian*,” *Quest* 106 (1994): 222.
- ² Deborah E. MsDowell, “The Self in Bloom: Alice Walker’s *Meridian*,” *College Language Association Journal* 24 (1981): 262.
- ³ Alice Walker, *Meridian* (London: Phoenix, 2004) 10. 以後、この作品からの引用はこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内に、その頁を記す。
- ⁴ Ashis Sengupta, 222.
- ⁵ Donna Haisty Winchell, *Alice Walker* (New York: Twayne Publishers, 1992) 60.
- ⁶ Donna Haisty Winchell, 62.
- ⁷ Martha J. McGowan, “Atonement and Release in Alice Walker’s *Meridian*,” *Critique* 23 (1981): 34.
- ⁸ Geri Bates, *Alice Walker: A Critical Companion* (Westport: Greenwood Press, 2005) 86.